

国語学習における「思考力・判断力・表現力」

1 国語科における「思考力・判断力・表現力」

国語科では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」のそれぞれにおいて、基盤となる知識や、問題に取り組むための方略を学ぶことになる。「学級会をしよう」や「表現をくふうして書こう」、「ごんぎつね」や「たんぼぼ」といった単元で学んだ知識や方略が、他の単元や他教科での学習、日常生活において活用できたとき、国語科の学習はその成果をあげたと言えることができる。このとき、「思考力・判断力・表現力」は、それらの知識や方略を運用する力として位置付けられる。

2 「思考力・判断力・表現力」をつけるための学び合いとは

秋田喜代美（2008）は、方略の習得において必要なことについて、全米読解力委員会の検討結果を引きながら、「特定の方略を個別に指導していくのではなく、テキスト全体を通じて教師や生徒どうしのやりとりという協働的な対話を通じた読みの活動の中で指導していくことが重要である」ことを指摘している（p.102）。知識や方略を用いて思考し判断し表現する（いかす）ためには、そこでその知識や方略を使うことを判断するための「適用条件」についての認識が必要である。秋田の指摘するように、「特定の方略」を習得するだけの学習では、その知識や方略が「どのようなもので」（what）、「どう使うのか」（how）の認識は身に付いても、「いつ、なぜ使うのか」（when, why）の認識は身に付きにくい。「協働的な対話」のある言語活動——すなわち学び合いは、学習者が問題を解決する過程において、知識や方略を再発見し、理解していく「知識創造型」（鶴田清司（2012））の学習となる必要がある。

3 学び合いの中での「いかす」

それでは、学習者が知識や方略を再発見し、理解していく学び合いとはどのような学習として考えられるだろうか。問題を設定し、その解決のための言語活動を行っていく学び合いにおいて重要なのは、その言語活動がどのような活動目標をもつものであるかが、学習者にとって明らかであることである。仮に、学び合いで行われる活動が、ただ教師が設定しただけのもので、なぜそれを行う必要があるのか、それをどこまでできれば目標が達成できたということができそうなのか、ということが明らかでない状況では、学習者は十分に「適用条件」について考慮することができない（ここでは、「いつ、なぜ使うのか」は問われず、「教師が設定したから使う」という状況が生まれる）。活動の目標が明確であり、その達成のために学習者が能動的に工夫をしようとしてこそ、「習得」した知識や方略を意味のあるものとして再発見し、「いかす」ことができるのである。このとき、学び合いにおけるクラスメイトや教師の存在は、「他者」として、自分自身の知識や方略を照射する鏡となると同時に、知識や方略の再発見のためのヒントともなる。

さらに重要なのは、その言語活動において「いかす」だけでは、それはただの体験で終わりがかねないということである。再発見し、理解した知識や方略について、あらためて振り返り、意味付けをしてこそ、体験は経験となり、知識や方略は定着する。授業におけるふりかえりは、ただ活動の内容を振り返るだけではなく、その活動において、どのような知識や方略を再発見し、使うことができたかを言語化し、意識化する機会である必要がある。

（共同研究者：島根大学教育学部言語文化教育講座，田中 耕司・初等教育開発講座，富安 慎吾）

【参考文献】

秋田喜代美（2008）「文章の理解におけるメタ認知」（三宮真智子【編】『メタ認知』北大路書房）

鶴田清司（2012）「知識・技能の習得・活用をめざす文学の授業」（『言語技術教育研究』2，さくら社）